

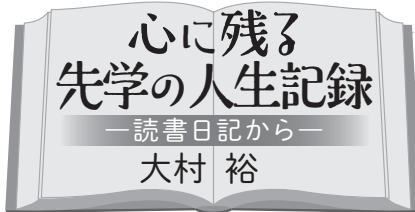
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.171
2017.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第1回

渡部義通ほか『思想と学問の自伝』

(河出書房新社 1974年)

渡部義通は、考古学者の間では和島誠一を考古学の世界に送り込んだ人物にして、『日本歴史教程』(第一冊～第二冊 白揚社 1936年～1937年)刊行のリーダー的存在として著名である。私がこの本と出会ったのは、2003年頃。母校中央大学考古学研究会の顧問であられた稲生典太郎先生の追悼論集に寄稿するため、稲生先生と山内清男の関係について調べていた時である。山内にマルクス主義者がどの程度影響を与えたのかを知りたくて、この資料を読んだ。この時は国会図書館で必要な部分のコピーをして取りあえず用を足したが、その後渡部の生涯についてもっと詳しく知りたいと思うようになり、古本を購入した次第であった。

この本は東京教育大学出身の伊藤晃・田中揮一・増田弘邦・松岡哲夫らが日本の労働運動・社会主義運動をになった現存者からの聴き取りの一環として渡部に取材したものである。ヒアリング・グループは、あらかじめ渡部に関わる詳細な年譜を用意し、聴き取りを始めたが、彼らの真摯な姿勢を意気に感じたのか、渡部自身も古い資料に再度当たり、記憶を呼び戻す努力をして、実に九冊のノートを作成し、これを横目に見ながら誠実に「自分史」を語っている。口述した文章は540頁に上る。他に渡部自身が雑誌『民話』(1960年4・5・6月号)に連載した青少年時代を回想した自伝(「思想と学問の自伝」)、および渡部の年譜・著作目録が巻末に収録されている。

膨大な内容をすべて紹介する余裕はないので、以下に目次を紹介し、私が特に感服した部分だけを述べることにする。

- はしがき、一. 社会主義の発見、二. 学生コミュニストたち、三. “山川イズム”を見る、四. 福島に根を下ろす、五. 日本共産党員、六. マルクス主義史学創世記、七. 奴隷制論争と『日本古代社会』、八. アジア的生産様式、九. 古代史補遺、十. 共同戦線思想の芽、十一. 閉塞の時期、十二. 懲役生活、十三. 民主主義科学者協会、十四. 国会議員、十五. 五十年分裂の“中間派”、十六. 党内民主主義、十七. 十二人の日共批判、十八. 非スターリン化の思想、十九. 転機—1968年

目次を見ただけで、戦前～戦後における社会主義運動やマルクス主義史学研究者の動向に興味を持つ者には、貴重な証言録であることに気付くであろう。証言は自慢話に陥らず、自己弁護もしないで淡々と行なわれている。

本書で特に私の目を引いたのは、戦後渡部の夫人となる三井礼子(三井財閥の総帥にして三井家第10代当主三井高棟の四女)と渡部との親密な交流である。礼子は1935年アメリカから帰国後、東京帝大の聴講生となり、同大図書室の研究室の二部屋を借り切って加藤

静枝らと女性史関係書籍の編集をしていたという。渡部はこの研究グループに講師として招かれ、それが縁となって親しくなったらしい。渡部のマルクス主義関係蔵書はこの最も安全な三井礼子の研究室に保管されていたのであるが、渡部の検挙後(1940年11月 逮捕理由は「治安維持法違反」)、ここを官憲に踏み込まれる。そして礼子は証拠隠滅のことで警視庁に召喚され、取り調べが行なわれたのであった。これを知った三井本社は三井礼子の釈放方を強行に警視總監に申し入れたのだが、このことでこの捜査を指揮した特高課長や係長の「田中警部」は警視總監から大目玉を食ったということである。三井礼子は、「危険思想」の持ち主の渡部の、どこに惹かれたのであろうか。彼女の気持ちを忖度するに、何と言ってもその旺盛な勉学意欲であったろう。1928年3月、いわゆる三・一五事件の折に渡部が最初の検挙に会うと、市ヶ谷拘置所において、午前中はマルクス主義関係の古典類(資本論はいうにおよばず、ドイツ語版の『経済学批判』など)の学習、午後は語学(とくにロシア語)、夕食後は歴史と文学を勉強することを日課としている。鉛筆の類は持ち込みが許されていないので、爪楊枝や爪で傍線を引きながら読んだという。程なくして左翼関係の本の差し入れが禁止になると、「日本の原始社会から階級社会の成立、国家の起源、その国家の性格など」を究明し、「圧政者の鼻をあかしてやれ」という意気込みで日本古代史の研究を始めることになったのであった。この問題意識が和島誠一に引き継がれることになる。

1940年の再検挙後は、古代インド研究を志し、“Cambridge History of India”の中の“Ancient India”とか“The Indian Empire”などを読む。そしてさらに、何十冊もある“Imperial Gazetteer of India”というシリーズを三井礼子に購入してもらって読み込みを始めているのである。刑務所の中での勉強は、自由な時間が少ないので、ノルマである封筒貼りの作業中、膝にドイツ語の原書などを置いて読んだり、5分で済ませられる食事を、病気を理由にわざわざ40分もかけてゆっくり時間をとり、食事の傍ら本を膝に載せながら読んだりしたという。就寝後は看守の目を盗んで4時間くらい勉強していたと回顧している。看守たちはこうした行為を多分見て見ぬふりをしていたのであろう。

こうした旺盛な学習意欲は当時の社会主義者の多くの人々に見られるが、その原動力となったのは、「社会の改良を実現するための理論的基盤の構築」というところにあったのだろう。激しい使命感が常人の数倍のエネルギーを生み出していたのかも知れない。顧みるに、私は考古学の勉強に対し、どのような使命感を抱いてきたのか。渡部の奮闘を見てその緊張感のなさに愕然とするのである。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

- 心に残る先学の人生記録—読書日記から—(第1回) 大村 裕 …1
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡—女として考古学研究者として—(第21回) 岡田淳子 …2

- リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第164回) 手柴友美子 …3
■考古学者の書棚 「天災と国防」 山本 誠 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第21回) 岡田 淳子

②余市大川遺跡が語るもの

余市川の右岸、河口一帯に広がる遺跡を大川遺跡と呼んでいた。すべてを調査し尽くすには多くの時間が必要であったが、私は5年余り係わって、縄文晩期、続縄文(恵山、後北)、擦文、中近世から現代まで、各時期の遺構調査に接した。

もともとは幹線道路に架かる「大川橋」の改修に伴う調査で、宮宏明氏が調査員として携わっていた。遺跡が大きく複雑で、それを俯瞰する者がいた方がよかろうということになったそうで、ちょうどそのころ国立大学を離れた私が依頼された。発掘が始まってから1年位経過した頃だったと思う。

当時はまだ道も狭く、小樽から先の古いトンネルでは水が滴り、冬になると凍っては溶けて今にも崩れそうだったので、私は安全確保のために、遠回りだが台地の中腹に出来た高規格道路を歩いて行き来していた。

調査に時間がかかりすぎるとの批判もあったが、それほど多くの遺構遺物が発見されたためである。余市はもともと文化財の豊富なところで、三笠山・地鎮山など縄文後期の環状列石、続縄文期の岩絵を伴うフゴッベ洞窟、近世近代はニシン漁で栄え、建物が文化財に指定されている下余市—上余市の二つの運上屋が置かれるなど、海運、漁業の中心地でもあった。

詳しくは余市町教育委員会が刊行した「余市大川遺跡」4冊及び対岸の「入船遺跡」の報告書を参照すると良い。主なものを記すと、縄文晩期の火による埋葬を思わせる墓壇数十基、数百に及び続縄文期の墓壇、ここからは、硬玉や琥珀の玉、漆塗りの品々が目を奪うばかりに発見された。続縄文期は墓地の発見に比較して、住居の発見が少ないが、ここでは住居も10数軒発見されて、注意深く発掘した結果、当時の生活を垣間見ることができた。

余市川河口の右岸には、古代擦文期の大集落があったと想定される。河口から古い砂堤を越え、その内陸側まで広がる集落は、アジア大陸からもたらされた遺物—北宋銭、青銅製品、黒色土器一本州から移入された、土師器、須恵器、鉄器なども発見された。

麦、米をはじめとする炭化した穀物粒の発見も数多く、穀物農耕をしていたものかと思われるほどであったが、船上輸送によったと考えることもできる。今後の研究に俟ちたい。



▲擦文遺跡出土の炭化した米

発掘区の上流には枝木による堰が造られていて、北大構内遺跡と共通するところも見られた。とくに複数の「夷」の文字の刻書が目を引き、土器につけられた文字には、「大」の文字がいくつも発見されている。集落の住居は、地床炉だけで竈の無いもの、両者を持つもの、南壁に完成された竈のあるものまで、少なくとも三つの違いが識別された。

中近世の遺構遺物の中から、私は余市川河口左岸で調査した「アイヌ墓地」に着目し、遠慮しながら「中近世アイヌ墓の検

証」としてこれをまとめた。おそらく、17世紀から18世紀にかけてのものと考えられる(『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版2000)。年代の決め手は、墓地は集落から川を渡ったところには造らないというアイヌ文化の慣習、余市川河口付近に大型船の出入りが少ない時期を考えてのことであった。この付近が賑やかに栄えているところに、わざわざ墓地を造ることは考え難いからである。時期はまた、キセルなどの副葬品からも推定された。交易船が賑わうようになって、墓は造られなくなったと考えて良いだろう。法律的にも調査可能なぎりぎりの年代であった。

墓壇は20基以上調査できたが、頭位は北東から南東すなわち海と川に向いており、浅い長方形のくぼみのなかに豊富な品が副葬されている。イカヨブや大きな太刀、八角膳を持つ男性墓と、太刀が短く小型シントコ、丸盆の目立つ女性墓を見分けることもできた。豊かな暮らしの人たちだったと想定される。川の左岸にそそり立つ岩山には、「あの世への入り口」と目される洞穴があって、墓から立ち上がるとその方向へ歩くと推測されている。

調査終了後、元余市コタンのエカシによって、先祖供養が行われた。余市アイヌの子孫が集まり、私たちも参加して、心のこもった供養祭ができた。

大川遺跡の調査結果を重く見た北海道考古学会は、1994年4月に「—古代・中世における日本海—余市大川遺跡をめぐる諸問題」と題して研究大会を行い、調査員宮氏の調査結果発表と、考古学・歴史学など4人の講師による北海道内・樺太・アジア大陸との関連についての研究発表も行われた。

さらに1995年9月には、文部省の後援による第10回「大学と科学」公開シンポジウム『北方文化と日本列島』が行われる。私はこの中で「流通拠点—余市大川」という題で、調査結果の発表をした。縄文時代は別としても、古代から始まった海の交通路は、中世・近世を通じて盛んに行われたに相違なく、これが大川遺跡の最も大きな特徴と考えてのことであった。海から見る余市付近は、白色の岩肌がそそり立ち、ひときわ目立って見える。舟で海上を渡って来た人たちは、それを目標に余市に到達したのであろう。

1990年代後半、勤務していた大学での管理的な仕事が忙しくなり、教育長と話し合っ、この仕事を辞めることにした。調査はほとんど終わった時期でもあった。

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010~2017年	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 164

花岡木崎遺跡 ～熊本県芦北町～

手柴 友美子

「マイ・フェイバレット・サイト」ということで、どちらかと言えば、悔いが残るという意味で心から離れない「花岡木崎遺跡」をご紹介します。

現在、私は熊本県南部の人吉市で、埋蔵文化財専門職として勤務していますが、花岡木崎遺跡は、その直前まで、県の嘱託職員として調査していた遺跡で、葦北郡芦北町に所在します。偶然にも、前回紹介された佐敷城跡のすぐそばにあります。

花岡木崎遺跡は、南九州西回り自動車道の日奈久ICから芦北へ抜ける「日奈久芦北道路」の建設に伴い調査した遺跡です。道路の計画ラインに従って調査するので、東西を流れる佐敷川と直行する形で、南北に細長い調査区が設定されていましたが、担当エリアはインターチェンジ部分でしたので、幅広くなっていました。調査期間も数年と長く、私の調査区の北側は、前年度まで違う方が担当し、炭化種子を多く出土する流路跡が検出されていました。

担当調査区のうち、北寄りのエリアからは古代の住居跡を複数検出し、南寄りのエリアは低湿な粘土層を検出するエリアで、遺構分布もまばらでした。当初は、単に古代の居住域という程度の認識で調査していたのですが、調査の終盤、同時期の井戸を完掘しにかかっていたとき、大変重要なものを発見しました。

それが「佐敷駅」と記された木簡だったので。恥ずかしながら、私は古代駅制に関する知識は皆無であり、木簡が出土した時点で、大慌てで勉強することになりました。熊本県では、それまで木簡の出土は1例しかなく、しかも駅家が推定できる貴重な資料とあって、処置という点でも無知な私は、時間とともに変色していく木簡に肝を冷やしたのを思い出します。幸い上司の適切なアドバイスにより、資料の価値を損なうには至りませんでした。

「佐敷駅」と明記された木簡の出土により、遺跡の性格を見直すことになりました。全国的にも、駅家と特定される遺跡の数は少ないのですが、過去の事例と比べて、遺構の種類や配置、遺物の見落としが無いかなど、様々な資料の見直しに迫られ、反省することもありました。結果として、当時私が感じたことは、今回の調査地は、駅家の範囲ではあるが、中心部ではないのだろうということでした。では、佐敷駅の広がりはどうなっているのでしょうか。

担当した調査地の北側は、前年度までの調査で広範囲に流路が広がっていることが分かっています。また担当エリアの南側も低湿な土層が広がり、遺構がほとんどありませんでした。ということは、駅家の広がり、私が担当した調査区の中心あたりから南北には広がらず、調査区と直行する東西方向、即ち佐敷川に沿って広がっている可能性が高いのではないかと考えました。しかも、佐敷川沿いの平坦地は、比較的狭いので、恐らく、駅家の中枢的機能も、川に沿って細長く続いている可能性があるのではないかと想像しました。しかし、

それと同時に、こんな低湿で氾濫の危険性のある川沿いに、駅家のような重要な機能を設定するのかという疑問も持ちました。

この調査のあと、すぐに私は人吉市に採用がきまり、結局、自分の担当のエリアについて、報告書を手付けませんでした。担当していない遺跡の報告書を何度も書いたことがありましたが、自分が同じことをしたことについて、今でも後ろめたい気持ちです。それから私は、花岡木崎遺跡について、罪悪感から目を向けられずにいましたが、ちょうど自分が調査した10年後の最近になって、花岡木崎遺跡を含む駅家推定遺跡に関する県内での発表がありました。私は一つのけじめとして、あるいは禊をする気持ちで聴講させていただきました。

発表者の方は文献史学の立場から、花岡木崎遺跡の重要性とともに、他の駅家推定遺跡全般を含めて、駅家の立地に関する興味深い意見を述べておられました。それは、駅家の広がり、一般的に狭い範囲に集中するという従来の考えではなく、数キロにわたって広範囲に存在するのではないかというものでした。正直、私が調査したとき、駅家の範囲が狭い範囲に集中するという事実まで認識していなかったため、再び腹の奥がキリリとしたのと同時に、発表者のご意見に対して、調査させていただいた者として、大変、共感するものがありました。数キロとまではいきませんが、私が花岡木崎遺跡で感じた範囲も、少なくとも1キロ以上の範囲に広がっているのを感じて覚えました。これは、佐敷川一帯の地形的な制約もありますので、広大な平地であればそこまで言えるか分かりませんが、そうしたご意見があり、嬉しく思いました。また、この他に、駅家には駅馬(伝馬)への世話のために、必ず水場が必要であるという見解についても、目からウロコが落ちる気がしました。それは、佐敷川沿いに駅家が広がるのではないかと思いつつも、果たしてここまで川に近接するのかという腑に落ちない部分を払拭された気がしたからです。私は、その発表に大変感銘を受けたのですが、その場では、来場者の方々から、根拠に乏しいのではないかというご意見もあり、また、数十年にわたり調査研究されておられる先輩方の中で、私は、怖気づき、また自分が報告の責任を果たさなかった後ろめたさから、意見をせずに終わってしまいました。遺跡のためにも、発表者の方のためにも、ご批判を覚悟で、申し上げるべきであったと深く反省しています。

結局、わたしは、調査の時から現在に至るまで、花岡木崎遺跡に対して、責任を全うできなかったと感じておりますが、一度はお話すべきと思い、この場をお借りして紹介させていただきます。

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは中山圭さんです。

※170号で手柴友美子様のお名前が由美子と誤った表記になっておりました。訂正し、お詫びいたします。 編集子

考 古学者の書棚

「天災と国防」

寺田寅彦／講談社学術文庫(2011)

山本 誠

私は兵庫県職員として、1995(平成7)年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財調査を経験した。さらに2012(平成24)年4月～2013(平成25)年3月の1年間、福島県教育庁文化財課の職員として福島県の復興に関わる埋蔵文化財調査の機会を得た。この派遣期間中に会ったのが関東大震災(1923年・大正12年)後に書かれた、寺田寅彦「天災と国防」であった。以下、少し抜粋(太字)してみる。

「人類がまだ草昧(=未開)の時代を脱しなかったころ、がんじょうな岩山の洞窟の中に住まっていたとすれば、たいいていの地震や暴風でも平気であったろうし、これらの天変によって破壊さるべきなんらの造営物を持ち合わせなかったのである。もう少し文化が進んで小屋を作るようになって、テントか掘っ立て小屋のようなものであれば、地震にはかえって絶対安全であり、またたとえ風に飛ばされてしまっても復旧ははなはだ容易である。とにかくこういう時代には、人間は極端に自然に従順であって、自然に逆らうような大それた企ては何もなかったからよかったのである。」日本においては旧石器～縄文・弥生時代に相当するであろう。

「文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そうして、重力に逆らい、風圧水力に抗するようないろいろの造営物を作った。そうしてあつぱれ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然があばれ出して高樓(=建物)を倒壊せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。その災禍を起させたもとの起りは天然に反抗する人間の細工であると言っても不当ではないはずである、災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするように努力しているものは誰であろう文明人そのものなのである。」東日本大震災発生直前まで何の疑いも無かった、防潮堤や原子力発電所に対する「安心・安全神話」は崩れてしまった。

「文化が進むに従って個人が社会を作り、職業の分化が起って来ると事情は未開時代と全然違って来る。天災による個人の損害はもはやその個人だけの迷惑では済まなくなってくる。村の貯水池や共同水車小屋が破壊されれば多数の村民は同時にその損害の余響を受けるであろう。」福島県須賀川市藤沼ダムは東日本大震災での決壊により約150万tの水が流出し、多くの樹木を巻き込んだ鉄砲水となって下流にある居住地域を襲った。死者7人、行方不明者1人、流失もしくは全壊した家屋19棟、床上床下浸水家屋55棟という被害を出し、田畑の土壌も多くが流失した。

「しかし昔の人間は過去の経験を大切に保存し蓄積してその教えにたよることがはなはだ忠実であった。過去の地震や風害に堪えたような場所にのみ集落を保存し、時の試煉に堪えたような建築様式のみを墨守(ぼくしゅう=がんこに守り通す)して来た。それだからそうした経験に従って造られたものは関東

震災でも多くは助かっているのである。」

遺跡をはじめとした文化財を「貨幣経済」からの観点でみると、「無駄なもの」、「復興の壁」、「貨幣価値を生み出さないもの。(保存のために費用がかかる。)」と経済的側面で評価され、生活に「直接的に必要でない」とされる場合があり、派遣期間中にはこの立場からの一元的な多くのマスコミ報道に触れた。

しかし一方、遺跡には、「災害を予防する先祖の知恵」が無限に詰まっている。東日本大震災で津波被害を受けて被災した新たな住宅建設のための高台移転候補地には、ほぼ例外なく縄文人の集落(宮城県石巻市中沢遺跡など多数)が存在していることが復興調査の結果で明らかとなった。原始・古代から繰り返し受けざるを得ない津波被害から、いかにして被害を少なくするのかといった「減災」の方法を、「遺跡の立地」として具体的に示している原始・古代から受け継いできた先祖からの知恵を、現代のまちづくりの理念に加えることで、より安全・安心な「まちづくり」が可能となるはずである。

また、現に文化財は震災発生直前まで「その街に長く人々が暮らしていた証」でもある。多くの「大切なもの」を失った方々にとって「人間社会」からの観点では、文化財は地域の個性を示す「唯一無二の宝物」である他、故郷を離れて避難している人々にとっても心の拠り所であり、実態として実感できる「故郷の社会の一員としての証」にもなっている。被災地各地におけるの伝統文化(祭り)の復興の早さ・多さがそれを雄弁に物語っている。(福島県南相馬市小高区の「村上の田植踊」は、震災後の2015年(平成27年)に福島県指定重要無形民俗文化財に指定された。)

非日常的な環境下では、文化財は「間接的・潜在的な人間社会に必要な基盤」であり、東日本大震災の被災地に限らず日本・世界中どこでも、文化財は決して開発・復興の壁ではなく、むしろ過去と現在をつなげ、未来への希望・復興を後押しする不思議な力をもつ、先人から預かった宝物である。



▲村上の田植踊

アルカ通信 No.171

発行日 2017年12月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp